

旧ユーゴスラヴィアにおける民族浄化の歴史連動性

吉田 昌弘*

A Study of Historical Aspects of Ethnic Cleansing in the Former Yugoslavia

Masahiro Yoshida*

This paper discusses the issues related to the serious incident and ethnic cleansing in the 1990s in the Socialist Federal Republic of Yugoslavia, which was founded in 1918 on the basis of multi-ethnicity and since then there had been few conflicts. In this article, I would like to explore these issues in terms of historical science, politics and rhetoric. First, from the standpoint of the Yugoslav modern political situation, the following results were obtained: (1) Each ethnic leader tried to agitate their people by insisting on nationalism (2) Not all of the people did not follow leader's assertion (3) Ethnic leaders had to make their people unite to prepare for coming conflict. Second, I analyzed the social context historically, and the result indicated that: (1) There had been few battles between Serbs and Croats until WWII and (2) Serbs and Croats did ethnic cleansing each other in WWII, which had the same conflict structure as the clash in the former Yugoslavia. These results led us to the conclusion that each ethnic leader in 1990's revived their dismal histories by rhetoric and made use of them to stir hatred, which led to hard-fight ethnic cleansing.

1. はじめに

本研究では、1918年の建国以来、複数の民族が平和に共存していた旧ユーゴスラヴィア連邦共和国の分裂に伴う紛争と民族浄化の要因—とくにクロアチアとセルビア間—を歴史的・政治的な因果関係に基づいて考察するものである。

7世紀ごろ、バルカン地域に移動してきた南スラブ民族のうち、クロアチア民族は、現在のクロアチア共和国北部を流れるドラヴァ川周辺と、アドリア海沿岸に定住し、セルビア民族はクロアチア民族の東部地域に定住することになった。その後、長い期間、オスマントルコ帝国やハプスブルグ家の被支配民族であったが、その民族間の関係については「それぞれの民族集団は日常生活においてお互いに寛容」¹⁾、あるいは「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける、ムスリム人・セルビア人・クロアチア人はきわめて近い存在であったし、歴史を振り返っても宗教の違いによる相互の殺し合いなどなかった」²⁾と

述べられている。さらに、セルビア民族とクロアチア民族は1919年にセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国(1929年にユーゴスラヴィア王国に改称)を協力して建国している南スラブ民族同士でもあり、この時点までは陰惨な民族紛争や民族浄化の要因は見いだすことはできない。

この状況が一変するのが、第2次世界大戦における枢軸国のユーゴ侵攻と分割占領であった。この時期、両民族間での陰惨な戦闘が繰り広げられたのである。その当時の対立構造と、旧ユーゴスラヴィア紛争(以降、旧ユーゴ紛争)とが酷似していることから、本研究では、この2つの紛争の歴史的連動性について考察してゆく。

2. 先行研究

旧ユーゴ紛争の研究のうち、連邦共和国の分裂・崩壊にかんする研究は数多く見受けられることができる。しかしながら、民族紛争の激化・長期化と民族浄化の要因を旧ユーゴ紛争と第2次世界大戦との関

* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2008年9月19日 受理

連について検討している研究は多くない。

柴ⁱⁱⁱは、旧ユーゴ紛争激化の要因について、(1) 民族主義的な政治家による扇動、(2) マスメディアによる民族主義プロパガンダ、(3) ユーゴ国外の民族主義グループの影響、(4) 民族主義を正義とする国際世論の4つに加え、「兄弟殺しの忌まわしい記憶」があったことを指摘している。

また、徳永^{iv}は、別の角度からこの紛争激化の問題をとらえ、その問題を4つの断層として挙げている。すなわち(1) 西と東の文化を隔てる断層を挙げ、その問題点を文化、風俗、社会感覚、労働意識の相違が軽蔑、反発、嫌悪感をかきたてていること、

(2) 宗教対立という断層を挙げ、宗教戦争ともなっていること(3) 第2次大戦期の怨念という断層であるが、これは第2次大戦中のクロアチア独立国がセルビア人を浄化のために大量虐殺しとことに対しての怨念がまだ存在すること(4) 主義・主張の断層である。民主化志向のクロアチアに対して、社会主義に固執しているセルビアという対立が存在していること、という主張であり、この四つの断層が深く混ざり合っていた社会において、連邦統合のたがが緩んだ時点で、民族がばらばらになり断層を押し広げて、これに火をつけて煽り立てている者の活動の場になったと述べている。

さらにMacdonald^vは、旧ユーゴ紛争と第2次世界大戦の関係を、双方の宣伝戦略に着目して考察している。そのなかで、セルビアとクロアチアとの宣伝戦略について、(1) 双方の政治体制を第2次世界大戦期のそれに重ね合わせて、極右民族主義(政権)というイメージを現代の体制に重ね合わせていたこと。(2) 第2次世界大戦におけるナチスとの協力関係、特にユダヤ民族迫害と結びつけて、双方の民族の残虐性を非難したこと。(3) 第2次世界大戦時のセルビア民族とクロアチア民族の犠牲の大きさを比較し、双方ともが自民族の犠牲が大きいことを強調して、被害者として国際社会からの同情をかおうとしたことを述べている。

同様に、メディアの宣伝戦略という視点からこの紛争を分析したThompson^{vi}も、お互いの第2次世界大戦期における民族主義政権の、自民族に対する虐待行為を紹介すると共に、その体制を現在に重ね合わせているという主張がなされている。

このように旧ユーゴ紛争の民族浄化の問題を、第

2次世界大戦との歴史的記憶との関連で論じられている研究は存在している。しかしながら、いずれの考察も歴史学や政治学といった個別的な視点での研究にとどまっている。本研究では、これらの先行研究を総合的に検証し、歴史学・政治学と言語学的(レトリック)観点から検討してゆきたいと考えている。

3. 旧ユーゴ紛争

3.1 旧ユーゴ紛争の概略

旧ユーゴ紛争は1991年6月のスロベニアとクロアチアの独立宣言に端を発している民族紛争であるが、単独の紛争ではなく幾つかの段階を経ている(下表参照)。

表 旧ユーゴ紛争の分類

紛争名称/期間/ 紛争地	対立構図	平和協定、他
10日戦争 1991年6月 スロベニア共和国	スロベニア共和国軍と旧ユーゴスラヴィア連邦軍との衝突	連邦軍の撤退とECによる休戦協定の締結
クロアチア内戦 1991年6月 ～1992年始め (1995年8月 ^{vii}) クロアチア共和国	クロアチア共和国軍とクロアチア在住セルビア人(クライナ地区)との衝突	国連による休戦協定の締結 クロアチア領内のセルビア人60万人が難民
ボスニア内戦 1992年 ～1995年11月 ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国	ボスニア・ヘルツェゴビナ独立をめぐり、独立を目指すクロアチア人、ムスリム人、セルビア人との衝突。	NATO空爆 アメリカのデイント空軍基地での交渉・合意(デイント合意) 死者20万人 難民250万人
コソヴォ紛争 1998年2月～6月 コソヴォ自治州	自治権を求めるアルバニア人とセルビア人の衝突	セルビアによるコソヴォ解放軍の大規模な掃討作戦 NATO空爆 アルバニア人難民約80万人

この旧ユーゴ紛争全体での被害は、「20万人を超える死者と350万人以上の難民・避難民を出す冷戦後最大の民族紛争となった」^{viii}との研究がある。この全体の数字から考えて、四つの紛争の中で、規模

と紛争期間の長さから考えるとボスニア内戦が突出していると考えられる。また、スロベニアの戦闘が短期間のうちに終了しているのに対して、クロアチア内戦やボスニア内戦が長期に及んでいる背景には、セルビア民族問題が関わっている^{ix}。

3.2 クロアチア内戦

1989年に始まったソ連邦の解体と東欧の民主化はユーゴスラビアにも波及した。一党独裁の地位にあったユーゴスラビア共産主義者同盟は1990年に、複数政党制による自由選挙をおこなうことを認め、クロアチアではトゥジマン率いるクロアチア民主同盟が共産党を破り、自身も統領に就任した。以降クロアチアは、ユーゴスラヴィア連邦からの独立を目指すこととなった。一方、セルビアでは、旧共産党勢力が選挙に勝利し、連邦維持に固執していた。

90年12月に、クロアチア共和国憲法が制定された。この憲法の中でクロアチアは自決権と国家主権を規定し、公用語をセルビア・クロアチア語からクロアチア語に変更した。一方で、90年後半から、クロアチアは共和国軍の設立を目指し、クロアチア警察がその中核として、連邦軍が設立・拡大されていたのである。1991年6月19日には独立の可否を問う国民投票が実施され、78%がクロアチアの独立に賛成した。これを受けて6月25日にクロアチアはスロベニアと共にユーゴスラビアからの独立を宣言した。

紛争の兆しは、以前より存在していた。90年9月には、セルビア人が多数を占めるボスニア・ヘルツェゴビナ周辺部に「クライナ・セルビア人自治区」が、西スラヴォニアでも「スラヴォニア・バラニーヤ・西スレム自治組織」が結成された。この地域では一時的にクロアチアとセルビアの間で武力衝突を回避するため、クロアチア警察軍を入れないという同意が成立していた。しかし、91年3月2日には西スラヴォニアのパクラツで、4月には東スラヴォニアのボロヴォ・セルでクロアチア警察軍とセルビア人住民が衝突をおこしていた。クロアチア独立の直前となる5月には「クライナ・セルビア人自治区」で住民投票が行われ、99%以上の圧倒的多数が、クロアチアからの離脱とセルビアへの編入を支持した。

6月25日の独立宣言以降、クロアチアで起こった

戦闘は、クロアチア警察軍とクロアチア国内のセルビア人住民の間で行われたが、9月22日にユーゴスラヴィア連邦軍がザグレブを攻撃して、正規軍同士の戦闘に発展してしまい、旧ユーゴ紛争が本格的に開始されたのである。特にクロアチア人とセルビア人が混住した地域で、かつ連邦軍の侵入が容易であったスラボニアでは民族間で住民が発砲し合うという事態もおこった。スラボニアのヴコヴァルでは87日間に渡って戦闘が繰り返され、両軍併せておよそ3,000人の死者を出した。

このような事態にたいして国際社会は、1992年2月に国際連合の安全保障理事会はクロアチアへの平和維持軍の派遣を決議するが、この平和維持軍の派兵では、互いに民族主権を主張しあう民族問題の最終的な解決には至らず、以降もクロアチアとセルビアの間で戦闘が散発的に継続し、1995年まで収束しなかった。

この戦闘に終止符を打ったのが、クロアチア軍による嵐作戦であった。1995年8月3日から始まったこの軍事行動ではクライナ・セルビア人共和国の首都クニンを目指して侵攻、わずか3日間の戦闘で同地を占領した。この時のクロアチア側の戦死者は約150人であった。一方、この地域を追われたセルビア人は15-20万人に達すると見られている。西スラボニアとクライナの喪失により、クロアチア国内のセルビア人は圧倒的に少数となった。しかしながら、この嵐作戦や、クロアチア内戦を通じて、双方による大規模な民族浄化が行なわれたのである。

4. 90年代のクロアチアとセルビア

これまでは、旧ユーゴスラヴィア紛争の経緯についてクロアチア内戦を中心に考察してきた。ここでは旧ユーゴ紛争の当事者となったクロアチア共和国とセルビア共和国がどのような国内状況であったのかを概観してゆく。

4.1 クロアチアの状況

トゥジマンとクロアチア民主同盟が1990年4月と5月の選挙で206議席(定数351)と過半数を獲得して、政権を握ると「自民族中心主義的な政策を推し進め、セルビア人は排除されていった」^xのである。国名をクロアチア共和国とあらため、国旗も社会主義の中央に星のあるものから、中世のクロア

チア王国の紋章と赤と白の市松模様に変更されたのであるが、市松模様とは、第2次世界大戦中のクロアチア独立国の象徴であり、トゥジマン自身も、ある党大会の中でクロアチア独立国の存在を肯定的に述べる演説をしているのである。「第2次世界大戦中のクロアチア独立国のパヴェリッチ専制下におけるセルビア人大量虐殺があり、クロアチアが独立を志向すれば、領内のセルビア人との関係をどのように扱うかという問題は不可避」^{xi}という懸念に対して、トゥジマン政権の出した答えが、上記のものであった。この結果として「トゥジマン政権成立後にセルビア人が反発を強めていく背景にはこうした歴史的記憶が影響していたのである」^{xii}というものは当然のことであると思われる。

さらに、12月22日に公布された新憲法では、クロアチア人の自決権と国家主権が不可分・不変であることや、公用語はクロアチア語とされ、文字はラテン文字^{xiii}を使用することが規定されることとなった。加えてクロアチア政府は独自の軍隊の組織化を、警察隊を中心に進めていったのである。ここに至って、クロアチア国内在住の少数セルビア民族は危機感、さらには恐怖すら感じたのではないかと考えられる。

このような状況の中で、クロアチアのセルビア人たちは7月25日（国旗変更の日、前述）にセルビア国民議会を召集し、「セルビア人の主権と自治に関する宣言」を採択すると共に、9月にはセルビア人の自治区設立（前述）に関する住民投票^{xiv}を行なうことも決定した。それに対して、トゥジマン政府は住民投票を阻止するとの声明を出し、直後よりセルビア側が主要都市の道路封鎖を行なうなど、武力衝突に向かっていったのである。

4.2 セルビアの状況

セルビアでも、1990年12月に議会選挙が実施された。ミロシェヴィッチ率いるセルビア社会党（旧共産党）が194議席（定数250）と8割近い議席を確保すると同時に、ミロシェヴィッチ自身も大統領選に勝利したのである。もともと、セルビア社会党は共産党やその大衆組織である社会主義者同盟が合併して生まれた党であり、必ずしも民族主義政党ではなかった。しかしながら、その後民族主義的な側面を全面に打ち出すようになり「セルビア社会党

にとって、セルビア人の民族的利益は多民族的なユーゴの維持に優先されるべき目標」^{xv}となったのである。

しかしながら、このミロシェヴィッチの政権は常に圧倒的な支持を得ていたわけではない。1992年12月の選挙では101議席、1993年12月の選挙では121議席と多少持ち直したものの、1997年9月の選挙では、110議席と、過半数には届かなかったのが実情であるが、このような状況においても、他党との連立内閣などで、政権を維持してきたのである。しかしながら、これら連立に参加していた政党も、「セルビア民族主義への距離、民主化への熱意などにおいて様々」であった。その表われとして、セルビアの週刊誌『ニン』の1991年7月号に掲載されたアンケートでは、クロアチア領内のセルビア人地域とセルビア本国との統一が正しいと考える人の割合が46%であったのに対して、誤りであると考えた人が49%であったのである^{xvi}。

4.3 セルビア・クロアチアの民族主義

上述のように、セルビア社会党とクロアチア民主同盟は、双方ともに民族主義を全面に掲げて政権を獲得した。しかしながら、クロアチアとセルビアの両国民・両民族が、実際にはどの程度民族主義を信奉していたかには疑念が残る。

例えば、クロアチア民主同盟の議会選挙での圧勝には、選挙制度の問題が指摘される。クロアチアの小選挙区2回投票制について「社会政治院選挙では、クロアチア民主同盟が獲得した票が2回とも40%を少しこえる程度に過ぎないにもかかわらず、獲得した議席は67.5%に達している」^{xvii}である。

また、セルビアの選挙結果も、最大獲得時でさえ、獲得議席こそ77.6%であったが、クロアチア同様、獲得票数は46%であり、その後の議席獲得数の落ち込みや、先述『ニン』のアンケートの結果を見ると、大多数の国民が民族主義を支持していたわけではないと考えられるのである。

政治的にはセルビア、クロアチアともに民族主義をもって政権を獲得し、ある一定数の支持を集めたこと。地政学的には、クロアチア内に少数派のセルビア人が住んでおり、分離独立を望んでいたことはたしかである。しかしながら、このような状況下では陰惨な民族浄化がおこなわれる民族主義的土台

が存在していたとは考えにくく、両民族指導者も、来るべき紛争に備えて、より自民族に団結をもたらす必要があると考えていたのである。それゆえ民族意識高揚のために、第2次大戦中の「兄弟殺し」(前述)の記憶を呼び起こす必要があったと考えられる。以下では、第2次大戦期の概要と、それがどのように利用されたのかを概観する。

5. 第2次大戦期のクロアチア・セルビア

とレトリック

ここでは、1941年4月の枢軸軍によるユーゴスラヴィア王国侵攻後の分割占領政策とそれに伴う内戦の状況について考察し、1990年代の旧ユーゴ紛争との対立構造の類似性を比較・検討するとともに、この争いがどのように利用されたのかについて検証してゆく。

5.1 第2次世界大戦期の旧ユーゴ

5.1.1 枢軸国の侵入

1941年3月に、当時のユーゴスラヴィア王国首相ツベトコヴィッチは三国同盟に加入したが、そのニュースが国内に流れると、首都ベオグラードをはじめとして、各地域の主要都市で反対の声があがった。これに呼応する形で3月26日に親西欧将校団のクーデターが成功を収め、シモヴィッチ将軍を首班とする政府が形成された。この政府が、引き続き三国同盟に留まる意志を示したにもかかわらず、クーデターの報告を聞いたヒトラーは、ユーゴ侵攻を決意、4月6日にドイツ・イタリア・ハンガリー・ブルガリアからなる枢軸国の作戦は開始された。この戦いは、わずか10日間で大勢が決し、シモヴィッチ政府と国王ペータル二世は国外に亡命を余儀なくされた。枢軸国側の占領下となったユーゴスラヴィア王国は、いくつかの地域に分割統治されるにいたったのである。

5.1.2 セルビア救国政府

セルビアは、ドイツの直接軍政下におかれた。その理由として、第一に戦争継続に重要な資源としてボーキサイドが産出されること、第二にこの地区の

鉄道が戦略上、重要な位置をしめていたということである。ドイツは戦前の国防省で、国民に支持のあったネディチを首相とするセルビア救国政府を傀儡政権として打ち立てた。ドイツ側の多頭の支配の影響で、行政面で混乱もあったが、ナチ主導で幾つかの武装機関の創立、維持を許され、主に治安維持活動に従事した。それらの機関は、当時のバルカン半島におけるドイツ軍の戦力的手薄さから、共産党員を中心として構成されていたヨシブ・ブロス・チトーのバルチザンとの戦闘にも参加した。

5.1.3 チェトニク

チェトニクとはユーゴスラヴィア王国軍の生き残りで、大セルビア主義を信奉するセルビア人たちが結成した戦闘集団である。チェトニクには、二つの大きなグループが存在しており、その一つはコスタ・ペツァナッチを指導者とするグループで、基本的には前述のセルビア救国政府指導下、対枢軸国との協力関係にあった。もう一つのグループが、ドラジャ・ミハイロヴィッチ率いるチェトニクであり、当初は、対独・反ファシストの立場をとっていた。しかしながら、チェトニクの究極の目標は、大セルビア主義—セルビア民族が他の南スラブ民族を指導する形での国家建設—であり、この考えが余りに強すぎた為に、枢軸国側からも連合国側からも、またバルチザンからも支持されず、孤立していったのである。

大戦中、チェトニクは大セルビア主義を旗印に、自民族以外を敵民族と見なしていた。ドイツ軍に対しては、待機戦術を取っていた反面、チトーのバルチザンに対してはドイツ軍と協力して、積極的な攻撃をするなどの二面性を持っていた。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、ウスタシャ(後述)に対して過酷な報復的民族浄化作戦も行っている^{xviii}。

5.1.4 クロアチア独立国

クロアチアでは、イタリアに亡命し、ムッソリーニの保護と援助を受けていたパヴェリッチを傀儡政権の代表として、クロアチア独立国が樹立された。パヴェリッチはドイツに積極的に協力し、国内のユダヤ人やロマ^{xix}の人々を一掃すると同時に、「純粋なクロアチア人国家」建設のために国内に住む約190万人のセルビア人をも「劣等で危険な人種」で

あるとして迫害したのである。セルビア人に対しては、抹殺、追放、(カトリックへの)改宗という三つの手段を駆使し、さらにヤセノヴィッツに巨大な強制収容所を建設して、多くのセルビア人が犠牲となった。この収容所では、何十万人という人びとが殺害されたとされているが、正確な人数ははっきりしていない。旧ユーゴ紛争の際、セルビア側が、ヤセノヴィッツ強制収容所を、ナチスのアウシュビッツ絶滅収容所と同列に見立てて、その残虐性を訴えたのである。

5.1.5 パルチザン

共産党ザグレブ地区のヨシブ・ブロス・チトーは、1941年6月に独ソ戦が開始されると、レジスタンス活動を開始した。ユーゴスラヴィア内では唯一、積極的に枢軸国軍に抵抗した集団である。ここで特筆すべきことは、パルチザンの呼びかけの核心が「友愛と団結」という民族政策である。この理念は「ユーゴスラヴィアの諸民族がそれぞれ固有の存在であり、平等に扱われなくてはならない」ということであり、大セルビア主義や極右クロアチア民族主義と大きく異なっていることである。そして、チトーは「ユーゴスラヴィア諸民族の完全なる民族自決の原則」と「各民族の政治的意志は強力に中央集権化された党組織を通してのみ表明される」という原則を打ち出したのである。緒戦では苦戦し、ボスニア各所を転々としながらも、民衆の支持を徐々に勝ち取ってゆき、開放地区を拡大していったのである。戦後、このパルチザン精神が、旧ユーゴの多民族社会の礎となったのである。

5.1.6 歴史事実の隠蔽

第2次世界大戦の構図を整理してみると以下のようになる。枢軸国側にはクロアチア独立国とセルビア救国政府及びペツァナッチのチェトニク、それに対して、反枢軸側には多民族のパルチザンが対峙している。ミハイロヴィッチのチェトニクは、対枢軸に対しては、待機戦術をとっている反面、クロアチア独立国に対しては、陰惨な報復攻撃を行っており、また反共の立場からパルチザンとの戦闘にも従事していた。この中でも特に、このウスタシャとチェトニクの陰惨な戦いの歴史は、ユーゴスラヴィア連邦の統一と維持のため、チトーによって封印され

てきたほどのものである。しかし、1991年に旧ユーゴ紛争が勃発すると、歴史的記憶が双方のナショナリズム高揚のためのプロパガンダの材料として利用され、連日メディアで伝えられたのである。

5.2 歴史的記憶による憎悪の扇動^{xx}

ここでは、前述のプロパガンダについて検討し、それがどのような効果をもたらしたのかを検証してゆく。特に、第2次世界大戦期の民族対立の象徴である「チェトニク」や「ウスタシャ」という言葉が使用された例を見てゆくこととする。

5.2.1 セルビアのメディア

私はウスタシャと交渉などするつもりはない。

(1990/7/26 ラシュコヴィッチ・クロアチア・セルビア民主党党首の発言)

ウスタシャはユーゴスラヴィアを破壊しており、セルビアのせいになっている。

(1990/10/03 ポリティカ)

ヤセノヴィッツを忘れてはならない。

(1991/6/25 ポリティカ)

これらの談話は、紛争勃発前後に掲載されたセルビア側に近い新聞の記事である。ウスタシャとはクロアチア(人)のことであり、クロアチア人を凶悪な極右民族主義者に喩えている。また、ヤセノヴィッツはウスタシャがセルビア人を大量虐殺した収容所(前述)で、セルビア本国から孤立したクロアチアのセルビア人居住地域の不安を暗示していると思われる。第2次世界大戦期のクロアチア独立国という表現によって、クロアチアに対してウスタシャを想起させている。

セルビア主導のメディアは、反クロアチアのプロパガンダのために、クロアチア独立国と関係する言葉を利用して、セルビア民族の結束をはかつていった。ポリティカは既に1990年の夏には、連日5~6ページを割いて、ウスタシャの歴史的な犯罪を報道していた。このようにセルビアでは、連邦の中心的立場を利用して、メディアを駆使し、事前にウスタシャの過去の犯罪は宣伝されていったのである。

5.2.2 クロアチアのメディア

セルビアから送り込まれたチェトニクが(この襲

撃に) 関与している。

(1991/4/日付不明 トゥジマン大統領)

警察官たちはチェトニクの狂人によって虐殺された。これはクロアチア国家の法的機関にたいしてのチェトニク略奪団の重大事件である。

(1991/5/03 クロアチアテレビ・ニュース)

これらは「チェトニク」という言葉が含まれた報道の一部である。チェトニクとは、セルビア人のことであり、セルビア人にチェトニクを投影する意図が伺える。さらに狂人、強盗団という表現がされているが、この時期のクロアチアにおいては、「チェトニクはジェノサイド的狂信者として表現され、自分達の大国家建設のために、クロアチア民族を根絶する」と宣伝されていた。

歴史家であるトゥジマン大統領自身もセルビア民族の犯罪性を生み出すために、第2次世界大戦期のジェノサイド的チェトニク運動の観念を利用したし、他のクロアチアの歴史家たちも、チェトニクの残虐性や第2次大戦中のナチスとの協力関係を、歴史学としてアピールしていった。

5.2.3 プロパガンダの効果

旧ユーゴスラヴィア紛争のプロパガンダの役割は、相手側の民族や政治体制を歴史的記憶のあるウスタシャやチェトニクと結びつけて、残虐行為のイメージを相手側に植え付けたのではないかと考えられる。クロアチアをウスタシャと同一化させることは、クロアチアの政府や民族に、ウスタシャの極右独裁政権やチェトニク(セルビア民族)に対する人種嫌悪と、それに伴う民族浄化のイメージを与える意図がうかがえる。またセルビアにチェトニクのイメージを重ねることは、他民族を強力に否定する大セルビア主義や親ナチであり反ナチであったという日和見主義的要素、さらに、ボスニアでの過酷な報復的民族浄化の実行者のイメージを植え付けることを狙ったものであると考えることができる。このように、双方が相互の恐怖心を煽ることによって、連邦国家として協調していたころのイメージを打ち消し、相互理解の道を狭めたと考えられるのである。

しかしながら、このプロパガンダはレトリック性が非常に高いものである。確かにウスタシャやチェ

トニクは歴史に残る大罪を犯したことは事実である。しかしながら、その犯罪行為を民族—ウスタシャ=クロアチア民族、チェトニク=セルビア民族—という枠組みに単純にあてはめられるものではない。なぜならば、ウスタシャはその指導者であるパヴェリッチが、長い期間イタリアに逃亡していた組織である。チェトニクも旧ユーゴ王国軍の僅かな生き残りであり、且つ組織が分かれていたのであり、共に民族の多数を占めていたとは考えにくいからである。さらに多民族が団結して戦ったパルチザンについては、まったく触れていないことから、これら一連の談話は、体制の主導した扇動行為であったと考えられる。

6. 結論

旧ユーゴ紛争時のセルビアとクロアチアの両指導者は、それぞれの民族意識の高揚を意図した民族主義者であった。しかしながら、選挙の得票結果を見る限り、彼らの政党を支持していた国民は、過半数に達していなかったことがわかった。このことは、それぞれの国民の多くが、民族主義自体を支持していたわけではないことを表している。そのような状況の中で、クロアチア側のユーゴからの独立とセルビア側のクロアチア離脱阻止という思惑を達成する為には、それぞれの民族の結束を図ることが重要であると考えたのである。故に、チトー時代によって封印されていた、過去の民族紛争の記憶を蘇らせることで、民族の団結を図ろうとしたのである。

正しい歴史的知識があれば、このような扇動に乗ることはない。しかしながら、クロアチアの離脱が決定的となり、戦闘が長期化・泥沼化してゆくにつれて、過去の記憶が民族浄化の引き金になってしまったのではないだろうか。紛争当事国の民衆に、冷静な判断力や倫理観があったとしても、一度動き出してしまった社会全体の流れは止められないのである。国際社会は、単に平和維持軍の派遣のみにとどまらず、このような民衆の扇動行為自体がおこらないように、協議していかなくてはいけないと思われる。

-
- i ドーニャ, R.J. ・ファイン, V.A., (1995) 『ボスニア・ヘルツェゴビナ史』(佐原徹哉訳) 恒文社 p.89
- ii 柴宣弘 (1996) 『ユーゴスラヴィア現代史』 岩波書店 p.175
- iii 柴宣弘 (1998) 「対立と相互協力の模索」 柴宣弘 (編) 『バルカン史』 山川出版社 p.379
- iv 徳永彰作 (1995) 『モザイク国家ユーゴスラヴィアの悲劇』 筑摩書房 p.68
- v Macdonald, B.D. (2002). *Balkan holocaust?* Manchester: Manchester Univ Press.
- vi Thompson, M. (1999). *Forging war*. Luton: University of Luton Press.
- vii この内戦の終了を「クロアチア領内のクライナ・セルビア人共和国の消滅」と考えると、この日が紛争の終結日である。
- viii 柴宣弘 (1998) 「対立と相互協力の模索」 柴宣弘 (編) 『バルカン史』 山川出版社 p.373
- ix 柴宣弘 (1996) 『ユーゴスラヴィア現代史』 岩波書店 p.169
- x 久保慶一 (2003) 『引き裂かれた国家—旧ユーゴ地域
の民主化と民族問題』 有信堂 p.159
- xi 月村太郎 (2006) 『ユーゴ内戦—政治リーダーと民族主義』 東京大学出版会 p.34
- xii 久保慶一 (2003) 『引き裂かれた国家—旧ユーゴ地域
の民主化と民族問題』 有信堂 p.16
- xiii セルビア人はキリル文字を使用していた。
- xiv 16日におこなわれたクライナ地区の住民投票の結果は得票総数の99.96%が自治区の成立に賛成という結果であった。
- xv 月村太郎 (2006) 『ユーゴ内戦—政治リーダーと民族主義』 東京大学出版会 p.44
- xvi 月村太郎 (2006) 『ユーゴ内戦—政治リーダーと民族主義』 東京大学出版会 p.39
- xvii 久保慶一 (2003) 『引き裂かれた国家—旧ユーゴ地域
の民主化と民族問題』 有信堂 pp.158-159
- xviii Cohen, P.J. (1996). *Serbia's secret war*. Texas: Texas A&M University Press.
- xix かつては「ジプシー」といわれていたが、この言葉は差別性の意味合いが強いことから、現在では「ロマ(民族)」と呼ばれている。
- xx ここでのニュース・メディアの談話は、全て Thompson, M. (1999). *Forging war*. Luton: University of Luton Press. より引用している。